



全国リレーエッセー
群馬県

早いもので私がこの上野村へき地診療所に赴任してから二年がたとうとしています。村内で唯一の医療機関である当診療所には内科、外科から小児科、皮膚科に至るまでさまざまな患者さんが来院します。

とはいえ、日本の将来を先取りしたかと思えるような40%を超える超高齢社会である上野村では、来院する患者さんの大半が高齢者で占められています。核家族化、過疎化が進む中で独居老人の人数が思った以上に多いというのが上野村に来て最初の印象でした。

協力的家族こそ

私が病院に勤めていたときは入院中の治療を行うことに精い

はまぐち しげと
濱口 重人 24期生、2001年卒



上野村へき地診療所の全景。隣接してデイサービスセンター、高齢者住宅もあり、施設は比較的充実している

群馬県上野村へき地診療所

【私の勤務地】群馬県の南端に位置する上野村は、埼玉県、長野県との県境に位置する人口約1500人の風光明媚な山村。痛ましい御巣鷹山の日航機墜落事故の現場として有名になってしまったが、渓流釣りのポイントとして、シーズンになると近県からかなりの釣り人が訪れる。

医療・介護・福祉の連携を

つばいで、その後の介護や福祉の面まで目が向いていなかったというプライマリケアの最前線

に赴任したことにより、以前より医療・介護・福祉の連携を考

えられるようになりました。医療面は、治療も含め全面的に家族が面倒を見るのは不可能だと思いますが、在宅での介護、福祉に関しては協力的な家族がいらずしやる患者さんと、家族と折り合いが悪い患者さんだと、生活の質(QOL)に関して大きな開きが出てくると実感しました。

「家庭医」として

本来であれば、政府が弱者優先の医療改革を行うべきだと思いますが、残念ながら現在の医療改革の結果、四万人以上の介護難民が発生するといわれています。その中で退院、退所可能な方の七割以上が「家族の都合」「独居」を理由に自宅に帰れないという現状は、やはり異常です。核家族化が一概によくないとは思いませんが、独居の方の往

診をしたり、家族と連絡を取ったりする中で、困っている時に助け合えるような家族を持つことは長生きの秘訣(ひけつ)かもしれないと思いました。

以前、九十五歳のおばあさんの所に往診に行きました。あまり目も見えずほとんど寝たきりの方なのですが、その時は少しせきと微熱が出るとのことでした。診察のあと、「軽い風邪でしょうから心配はいらないと思います」とご家族にお話ししましたが、その間ずっと二十代の孫がおばあさんの手をさすりながら横についていて、心配ないと言つと心底ほつとしたような顔をしていたのが非常に印象的でした。

こんなご家族のおかげでこの患者さんはここまで元気に長生きできたのかもしれないあと感じました。

今後も村の福祉、介護関係の職員とも協力して、「病氣」だけでなく、「患者さん」を見ていける家庭医として、患者さんやご家族の手助けをしていけたらと思います。

(次回予定は山口県)